

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

On Akan'e in the context of historical study of Russian language

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2005-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡本, 崇男, Okamoto, Takao メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/704

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ロシア語史研究における 「アーカニエ」の扱いについて

岡 本 崇 男

1 「アーカニエ」とは

「アーカニエ」(аканье)とはアクセント音節の直前の非アクセント音節にある(形態)音素 /a/ と /o/ が区別されず、いずれも [a] に似た音色の母音で実現される現象を意味するロシア方言学の用語である。他にも、同じ位置で /a/ と /o/ を区別する「オーカニエ」(оканье)、軟子音の直後の同じ位置で /e/ と /a/ を [a] と発音する「ヤーカニエ」(яканье)、同様の環境で /e/, /a/ を [i] のように発音する「イーカニエ」(иканье) など様々な現象がある。

しかし、アーカニエのみは、東スラヴ語のたんなる方言的現象としてではなく、ロシア語史および歴史方言学の特別な研究対象となってきた。例えば、1963年から1965年にかけてソビエト科学アカデミー言語学研究所の『言語学の諸問題』誌上では、アーカニエの発生とその音韻論的本質をテーマにした論文がいくつか掲載され、この問題に対する関心の高さが示された。

このようにアーカニエのみが同種の方言現象の中で特別扱いされてきたのは、これが現代標準ロシア語の発音規範に採用されているからだと思われる。例えば、アーカニエの対極にある現象である「オーカニエ」、すなわちアクセント音節の直前の音節において音素 /a/ と /o/ が区別される現象につい

て関心が払われるのは、アーカニエが最重要のテーマになっているときが最も多い。つまり、同じ地域的な音声現象であっても標準語の発音規範に採用されるか否かで、学問的な重要度も違っているかのような扱いを受けているのである。

ところで、先ほど述べた『言語学の諸問題』誌上の議論の焦点はどこにあったのだろうか。これについては、この論争の最後の発言者であるG・A・ハブルガーエフの論文の冒頭部で知ることができる。

現在、南ロシア諸方言とベラルーシ諸方言で行われている非アクセント母音の表し方を作り上げるに至った連続的な音変化を正しく理解するためには、アーカニエ・ヤーカニエの音韻論的本質を明らかにすることが必要である。だからこそ、アーカニエの音韻論的解釈(фонология аканья)がいま『言語学の諸問題』誌上で展開されているアーカニエの発生の問題にかんする議論に参加した人々の関心の中心に置かれているのである[Хабургаев (1965: 53)]。

すでに1915年にシャフマトフがアーカニエの発生に関する仮説を公表してから50年後にこうした論争が起きたということは、まだ定説と見なされる見解がなかったと見て良い。実は、現在でもこの現象が発生した原因と時期、そして伝播の経路に関する決定的な答えは見つかっていないのである。

以上のような状況を踏まえた上で、アーカニエという現象を歴史的文脈の中で考えるための出発点として、本論文ではこれまでアーカニエの起源がどのように議論されてきたのかを概観し、問題点を整理するとともに、アーカニエと表記の関係について検討したい。

2 アーカニエの起源にかんする議論

アーカニエが発生した時期とその原因にかんしてさまざまな説明がなされているが、これらはほぼ以下の二つの見解に集約することができる。

先ず、第一の考え方は、アーカニエを生み出す原因がスラヴ語祖語にすでに備わっており、東スラヴ語の一部の方言で早い時期からこれが現れていたというものである（自然発生説）。従って、この現象が観察される方言は、スラヴ語の古い状態を保っていることになる。

これに対してもう一つの見解によれば、先の自然発生的な説明の可能性は否定されてしまう。つまり、共通スラヴ語の音韻体系の変化の枠組では、アーカニエの出現が説明できないことを認めるのである。その代わり、他の言語と直接接触したことによって、東スラヴ語の一部の方言の母音体系に変化が生じたと仮定する（他言語基層説）。この場合、言語接触が起こるのは東スラヴ人が居住地を拡大し始めてからなので、8-9世紀以降であり、アーカニエという現象が形成されるのは更に何世代か後のことになる。

もちろん、発生の時期と原因とを分けて考えることも可能である。例えば、アーカニエは母音組織の内的変化によって生じた現象だと考えるが、その発生の時期は比較的新しいという仮説が存在している（後期発生説）。特に、問題の現象が文字表記に影響を与えた例、すなわちアーカニエの存在を確証する文献が現われるのが比較的遅いという事実を考慮すると、後期発生説には一定の説得力が生ずる [Хабургаев (1965), 中村 (2004a) および中村 (2004b)]。

2.1 自然発生説

アーカニエがすでにスラヴ祖語にその起源をもっていたという仮説は1915年にシャフマトフによって公表されている。しかし、この現象が反映された最初の文献が現われるのが14世紀前半であることから、この仮説は拒否され、発生時期も歴史時代にまで引き下げられた [Issatchenko (1980 : 182)]。

しかし、先に述べた『言語学の諸問題』誌上の議論の発端は V・I ゲオルギエフが論文 [Георгиев (1963)] の中で以下のような問題提起をしたことにある。すなわち、スラヴ語に借用された最古期の名詞やスラヴ語に採り入

れられた非スラヴ語の地名や人名、そして古代の非スラヴ人によるスラヴの固有名詞などから考えて、スラヴ祖語には短母音音素 o が存在していなかった。従って、o : a という母音の相関もなく、その代り相関 ä : ā が存在した。そして、「後に、文字が出現する直前になってようやくスラヴ祖語の ä は円唇化されて o となり（ただし、これは地域によって生じた時間も異なる）、これに応じて相関関係にあった ā が余分な弁別特徴を失って短音の a となった」[Георгиев (1963 : 20-21)]。したがって、ロシア語とベラルーシ語のアーカニエにはスラヴ祖語時代の音声特徴が反映されているというのである。

つまり、アーカニエがスラヴ祖語から継承されたという仮説は完全に拒否されたわけでないのである。しかし、後期発生説を支持する立場を取る研究者には、「今まで提案されたロシア語のアーカニエの音韻論的解釈の中には、問題を根本的に新たに解決しようというのではなく、かつて提示された音声学的な仮説を音韻論のレベルに移行させたにすぎないものがある」[Хабургаев (1965: 53)] としか見えない。

2.2 他言語基層説

東スラヴ語以外の言語との接触が原因でアーカニエが生じたという「他言語基層説」を最初に唱えた最初の人物が誰なのかということを筆者(岡本)はまだ確信を持って言うことができない。しかし、それはおそらく第二次世界大戦後のことであると思われる。例えば、言語学者 S・B・ベルンシュテインは、スターリンの言語学上の業績を讃える論文の中で、N・P・グリンコヴァの著作『ヴォロネジ諸方言』⁽¹⁾を紹介しつつ、著者グリンコヴァのハザール語基層説に言及している [Бернштейн (1951 : 21-22)]。この論文は「ヤフェット学説」を提唱したニコライ・マール(1864/65-1934)とその追従者たち(グリンコヴァもその一人)の学説がいかに誤ったものであったのかを指弾することが目的であったので、当然ハザール語基層説も学術的に根拠

のない空論であると決め付けられている。また、現在この説を支持する研究者もおそらくいない。

2.2.1 フィノ・ウゴル語基層説

グリンコヴァのハザール基層説とほぼ同じ頃、1949年にフィンランドのG・J・ステイパがフィノ・ウゴル語基層説を唱えている⁽²⁾。これは、東スラヴ系のヴァチチ族が東方に移動して、現在では代表的なアーカニ方言地域の一つとなっているリャザンの東を流れるモクシャ川(オカ川の支流)流域に居住するウゴル系モルドヴィン族と接触した。その結果、ヴァチチの言語が非アクセント音節に後母音を持たない(a, ä, eのみ)モルドヴィン語の影響を受けてアーカニエが生じ、ヴァチチの言語を通じて他の東スラヴ方言にもこの現象が伝播したという仮説である。しかも、1950年代にソビエト連邦で行われた考古学調査によって、モルドヴィン居住地域でのスラヴ人の入植状況にかんする新たな発見があり、10世紀末までにはスラヴ人がこの地域に深く入り込んでいたことがわかったため、この仮説はそれなりの説得力を持つに至った。

基層による言語特徴の浸透は、ステイパによれば以下のようなプロセスを経る。

同化することによってヴァチチ族の言語にモルドヴィン語の基層を形成するための土台が作られたことは疑うべくもない。この基層の担い手は第一にロシア化されたモルドヴィン族、それも主として女性達であって、入植者の家政において母親の役目を果たしていた。彼女達の発音は新しい世代の者達に強い影響を与えたに違いない。一方でまた、次々と流入し続けるヴァチチ族の言語も既に定住した人々の地域的特徴に容易に染まるかもしれず、「伝染力」を持った音声特徴はすぐに広まるかもしれないのである [Stipa (1974: 331)]。

ステイパの仮説が公表されたのは1952-53年であるが、実際に広く知られ

るようになるのは1974年の論文[Stipa (1974)]からではないかと思われる。スティパによれば、ヴァチチの言語にアーカニエが定着する時期は7世紀以降のことなので、アーカニエの後期発生説と無理なく結びつけることができる。つまり、共通スラヴ語から東スラヴ語が分岐する時期にアーカニエも一部の方言に獲得されていたということである。A・イサチェンコは「証明されてはいないが、こちらのほうが説得力を持つ」と述べてこの仮説に好意を示している [Issatchenko (1980 : 183)]。

2.2.2 バルト語基層説

東スラヴ人がバルト語族と接触することで、アーカニエを獲得したという仮説はフィノ・ウゴル語基層説よりも新しいようである。おそらくG・シェヴェロフの指摘が最も古いもののひとつであるらしい [Shevelov (1964 : 386-387)]。すなわち、バルト語起源の水路名がドニエプル川の上流域と中流域に存在しているので基層が存在したことは確実である。印欧祖語の *ǎ* と *ō* がリトアニア語とラトヴィア語では *ǎ* に融合し、スラヴ語ではこれらが *ō* に融合している。また、印欧祖語の *ā* は、リトアニア語で *ō* となり、ラトヴィア語とスラヴ語では *ā* となる。従って、スラヴ語の *o* は常にバルト語の *a* と対応することになる。そして、スラヴ語の *o* がアクセント位置では本来の質的な特徴を保ったのだが、弱い位置つまりアクセントのない位置では基層の発音習慣の影響を受けて *ǎ* と発音された [Shevelov (1964 : 387)]。これがベラルーシ語のアーカニエの原因ではないかというのである。

更に、シェヴェロフは、これとは逆の現象の存在を紹介している。つまり、東部ラトヴィア方言では印欧祖語の *ō* に起源を持つ *ǎ* がスラヴ語と同じように *o* と発音されるという（標準ラトヴィア語では *a* となる）。つまり、これはベラルーシ語のアーカニエとは逆の現象であって、バルト語が「オーカニエ」のスラヴ語と接触した結果生じたのではないかと考えている [Shevelov (1964: 387)]。

これら二つの対立する事象に確実な証明を与えることも、また確実な反証を挙げることも不可能であると認めながらも、シェヴェロフはアーカニエの起源について以下のように締めくくっている。

しかし、バルト諸部族の東の歴史的な境界が強いアーカニエ⁽³⁾の等語線と一致しているという事実は衝撃的である。ベラルーシ語と南ロシア方言のアーカニエの起源がバルト語にあるというのは仮説の域を出ないのであるが、かなりの真実味がある。しかし、この見解を受け入れるかどうかには拘らず、アーカニエが先史時代にベラルーシ語領域で生じ、スラヴ語に共通した $\text{ä} > \text{o}$ という発達に対する方言的逸脱となったという主張自体を拒否することはできない [Shevelov (1964 : 387)]。

東スラヴ人とバルト人との接触がどのように行われて、基層の形成に至ったのかについて、リトアニアの言語学者 Z・ジンケヴィチュスの説明をまとめると以下のようなになる。すなわち、バルト人の東の境界は確実なところでカルーガ付近まで、場合によってはモスクワ、トゥーラ、クルスクを結ぶ線まで拡張できる可能性がある [Zinkevičius (1996 : 12)]。スラヴ人は南からドニェプル川沿いに北および北東に素早く拡張して、バルト人居住地域の中心部に入り、更に北上してプスコフ、ノヴゴロドに至る。そして、5-6世紀にはフィノ・ウゴル系諸部族と直に接触した。このためバルト人の領域は西と東に分断されることになり、西部のバルト諸部族はプロシア、ラトヴィア、リトアニアを形成することになるのだが、東部のバルト諸部族はスラヴ人に同化してしまった。ただし、バルト語起源の水路名が多数保存されていることから、大規模なスラヴ人の移動の波はなかったと考えられる。したがって、バルト人のスラヴ化もゆっくりと時間をかけて行われ、バルト語とスラヴ語との二言語併用 (bilingualism) の時代があったはずである。そして、ルシのキリスト教受容 (10世紀末) に伴って書き言葉が用いられるようになったため、言語のスラヴ化が確実なものとなった。東スラヴ語がバルト語基層

の上で発達したことで、東スラヴ語特有の言語特徴（例えば、母音充足やアーカニエ）が形成された[Zinkevičius (1996: 24-26)]。

1963-65年に『言語学の諸問題』誌上でアーカニエをテーマにした論争が続いていた最中にシェヴェロフのバルト語基層説が公表されたわけであるが、これもステイパのフィノ・ウゴル説と同じく注目されていない。例えば、自らもこの論争に参加したG・A・ハブルガーエフ [Хабургаев (1965)] も他言語基層説には一言も触れていない。

しかし、後にハブルガーエフはバルト語基層説の支持者となった。バルト語基層説もアーカニエ後期成立説と矛盾しないからである。例えば、1980年の『ロシア語の成立』の中でハブルガーエフは東スラヴ語の中央方言地帯を特徴付けるものとして異化的アーカニエ⁽³⁾を取り上げている。この現象の北限はロシア語とベラルーシ語との方言対立等語線で、南限はベラルーシ内の方言対立等語線である。これらの線に挟まれた地域は現在のベラルーシおよび南ロシアの諸方言が含まれているので、異化的アーカニエはベラルーシ語が独立する前にこの地域で形成されたということになる。そして、「この地域は中世ロシアの文化の中心地（キエフ、ノヴゴロド等）から離れており、またバルト人のスラヴ化が行われた領域の内部にあるが、地理的に見ると中世ロシアの中心を成していて、ここが中世ロシア後期の言語的革新が起こった中心地帯だと考えて良い」と断言している [Хабургаев (1980:137-138)]。この「中心地帯」は図1の地図（上がほぼ真北⁽⁴⁾）の上で北西から南東に向かって引かれた二本の太線で囲まれた領域、すなわちビテプスク、スモレンスク、マヒリョウ、ブリャンスクなどの都市が含まれる領域を指している。

2.3 問題点

アーカニエの発生に関する議論はいまだに決着を見ていないのであるが、この現象がスラヴ祖語の遺産であるという立場（内的発展説）に立つ研究者はあまり多くないようである。またこの見方を否定するために挙げられた根

拠にも、かなりの説得力があると思われる。従って、東スラヴ語にアーカニエが生じたのは12世紀以降であり、その原因は東スラヴ人が居住地域を拡大する過程で接触した他民族の言語の影響による（他言語基層説）という説明が有力となる。

フィノ・ウゴル語基層説を支持する立場の人々は、リャザンのオカ川流域に居住したヴァチチ族がアーカニエ方言の最初の担い手だと考えている。しかし、これだとヴァチチ族は初め東に移動してウゴル系言語と接触し、アーカニエを採り入れ、次に西に移動してこの方言特徴を広めたということになる。あるいは、年代記等の歴史記録によれば、ヴァチチ族がキエフ、チェルニゴフ、スーズダリなどの周囲の公国に次々と支配され、14世紀末には西の一部がリトアニア大公国領となってしまったので、その度にヴァチチ族のアーカニエが彼らを支配した公国に広まったとでもいうのだろうか。

これに対して、バルト語基層説は、現在のアーカニエ地域がほぼかつてのバルト語族居住地域と重なっていることが根拠となっているのだから、特定の部族の移動を考える必要がない。この点で無理の少ない仮説であると思われる。

しかし、いくつかの現存するアーカニエのタイプのうち、もっとも原初的なものが何であるのかについては意見が別れている。例えば、ハブルガーエフは中心地帯を特徴付ける異化的アーカニエが最古の形式であり、中心地帯を挟んだ両側に広がっている強いアーカニエが新しい形式だと考えている[Хабыраев (1980 : 143)]。V・チェクモナスもアーカニエが中心地帯から周囲に伝播したという考えを支持しているのだが、どちらのタイプのアーカニエが古いのかという点についてはハブルガーエフと逆の見解を主張している。なぜなら、「類型的研究の結果、非アクセント母音が縮約される言語においては質的あるいは量的な異化作用が行われない」ため、異化的アーカニエから強いアーカニエを導き出すことができない。可能な発達の過程は、 $*C\check{a}C\acute{a} // CaCv > *C\check{b}^a(\alpha)C\acute{a} // CaCv' > C\check{b}(\alpha)C\acute{a} // CaCv$ しかありえないと

いうのである [(1987 : 346)]。この主張の根底には、革新が起こっている中心部の方が変化が進んでおり、周辺部はそれほど活発に変化が起こらないし、古い革新が残っていることもある [Чекмонас (1987 : 336)] という言語発達にかんする一般的な考え方が根底にある。⁽⁵⁾

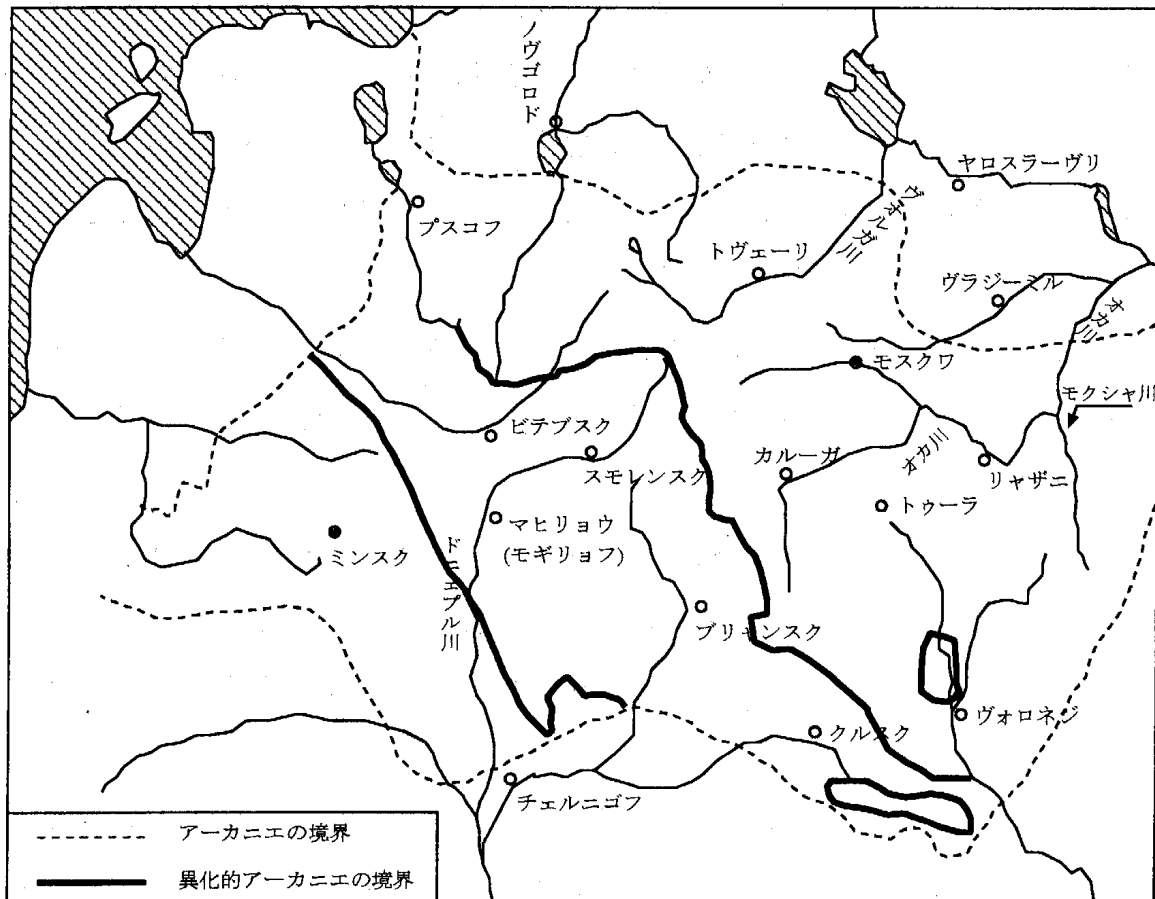


図1 アーカニエの現象が見られる地域⁽⁴⁾

3 東スラヴ語文献における A と O の表記の特徴

アーカニエの後期発生説がソビエトのロシア語史研究で主流となり、やがて他言語基層説が受け入れられるようになったのは、既に述べたように文献にアーカニエの痕跡が現われるのが遅かったことが理由となっている。アーカニエが表記に反映されるのが遅かった第一の理由として、G・シェヴェロフは、中世ロシアの書記伝統を作り上げたのが、この現象を知らないキエフとノヴゴロドという二つの都市であったことを指摘している [Shevelov

(1964: 386)]。しかし、国土のかなりの部分でアーカニエが観察され、現在ではこの現象が標準文章語の表記に反映されるベラルーシにおいても、かつてはキエフやノヴゴロドと同様の正書法が採用されていた。また、アーカニエを発音規範に採用している現代ロシア語は、A と O の表記について原則として中世のキエフやノヴゴロドの正書法の伝統を受け継いでいる。つまり、発音と表記の関係は様々であるので、その関係の本質を充分に考えずに、発音の変化の証拠を表記に求めると、方法論上の誤りを犯す可能性がある。そこで、東スラヴ語文献における A と O の表記の歴史に見られる若干の特徴について考えてみたい。

一般に、書き言葉に表音文字アルファベットを使用している言語の多くは、実際の発音に忠実な表記の体系を持っていない。それでも、表記と発音との間に一定の対応関係があれば、外国人を含めたその言語の使用者にとって大きな不都合は生じない。また時代と共に発音が変化しても、文字と音との対応関係が変化するだけで、表記はかなり長い間保持されるのが普通である。むしろ、発音に忠実な正書法を維持しようとするれば、一定の時間が経過するとそれに何らかの修正を加える覚悟が必要となる。例えば、「母音は発音されるように」書かれ、「子音は発生(語源)を考慮して」書かれる [Тарашкевіч (1929: § 73)] という原則が採用された現代ベラルーシ語では、1959年に改正された正書法と実際の母音の発音との間に食い違いが目立つようになったため、新正書法をベラルーシ科学アカデミー言語学研究所が公表することになったようである(インターネット上の情報紙《7 дней》の記事に依る⁽⁶⁾)。ベラルーシ語の現行の正書法は、母音および一部の子音の発音を音声学的原則に基づいて表記するのであるが、その出発点として明らかにロシア語の表記体系が土台となっている。例えば、ДА—ДЗЯ, ДЫ—ДЗІ, ДЭ—ДЗЕ という対立を見れば、綴り ДЗ の二番目の要素 З は余計な文字であることがわかる。すでに母音文字の対立があるのだから, ДЯ [dzja], ДІ [dzi], ДЕ [dze] という発音と表記の関係が確立されればよい

はずであった。

もし書き手の発音の特徴が必然的に文献に現われるとすれば、守旧的だと考えられている北東ルシの文献でも14世紀からモスクワの発音が表記に影響を与えた証拠があるのだから [Shevelov (1964: 386), Issatchenko (1980: 182)], ベラルーシで書かれた俗語文献であれば、この地域の発音習慣が反映されていても不思議ではない。しかし、現存する資料が提示する事実はどうした予想を完全に裏切ってしまう。例えば、俗語文献の代表であるベラルーシ年代記では、アクセントを持たない位置での O と A の表記には多少の不安定さが見られるものの [岡本 (1997: 30)], 原則として語源的な O と A は単語のどの位置であっても保存されている。

しかし、ベラルーシ年代記に現れるリトアニア人の名前の表記には、音素 /a/ と /o/ の再現にかんして独特の規則が存在している。表1の左側の欄にある16—17世紀の南西ルシ世俗語形と右の欄に書かれた現代リトアニア語の形式を比較すると、前者の O にリトアニア語の A が対応し、A にはリトアニア語の O が対応していることがわかる。そして、リトアニア語の A は短母音 /a/ を表し、AI, AU, AL における二重母音の第一要素 A もやはり短い /a/ である。一方、リトアニア語の O は長母音 /o:/ を表している。もっとも、この母音文字の対応は南西ルシ世俗語に特有のものではなく、北東ル

表1：リトアニア年代記におけるリトアニア大公名の表記

南西ルシ世俗語形	現代リトアニア語
Витень	Vytenis
Витовтъ, Witolt, Witowt, Witold	Vytautas
Воишелкъ	Vaišvilkas
Довмонтъ	Daumantas
Гедеминъ	Gedeminas
Олжгирдъ, Olgierd	Algirdas
Миндовгъ, Мендовгъ	Mindaugas
Тренята, Tronjata	Treniota
Троиденъ, Trojden	Traidenis
Якгаило, Якгоило, Jagoyło, Jagayło	Jogaila

シのノヴゴロドや西ウクライナのガリチで書かれた、より古い時代の年代記テキスト（例えば、『ノヴゴロド年代記』や『イパーチイ年代記』）にも見られる東スラヴ語に共通した転写法を継承したものであると考えられる。このことから、伝統的に東スラヴ語の /a/, /o/ とリトアニア語の /o:/ /a/ との間には何らかの点で類似性があったと考えることができる。

それでは、/a/ー/o:/, /o/ー/a/ の二つのペアにはそれぞれどのような共通性があり、東スラヴ語の /a/ー/o/ とリトアニア語の /o:/ー/a/ には並行関係が認められたのであろうか。「先入観を持たない（つまり音声学の訓練を受けていない）話者が自分の言語で聞き取ることができるのは音韻論的価値を持った差異、つまり当該言語で単語の知的な意味を区別するために利用される差異のみである」という「公理」[Trubetzkoy (1968: 8)] が他言語の認識に際しても準用されるとすれば、先に挙げた二つの母音のペアには、それぞれに共通した弁別特徴が感じられていたはずである。

ただし、この問題を考える際に、おそらくアクセントの位置はあまり重要な意味を持っていない。表1に挙げられたリトアニア大公名は現代ロシア語にも継承されているのであるが、これらの形式のアクセント位置はリトアニア語の形式と一致するものとししないものがある。例えば、Гедемін (Gediminas), Ягайло (Jogáila) は一致しているのだから、Ольгирд (Aīlgirdas), Витовт (Výtautas), Миндóвг (Mindaugas), Вітень (Vytēnis) はアクセント位置が前または後ろに1音節分ずれている。現代ロシア語形のアクセントが東スラヴ共通のものだと仮定すると、「リトアニア語形のアクセント位置にかかわらず、二重母音 AI, AU はそれぞれ ОИ (Oĭ), ОВ と転写されて O がアクセントを持つ」と言うことができる。なお、南西ルシ世俗語の A にリトアニア語の A が対応している例 (Якгаило/Jagaylo-Jogaila) が存在しており、後にこちらの形式が一般化してしまった。

この転写法が東スラヴ語地域共通のものであったということは、アーカニエ地域、非アーカニエ地域にそれぞれ A と O を区別する方法があったこと

を意味している可能性がある。そして、母音の表記を決定する際に、アクセントの位置があまり関与していないということは、純粹に長さの違いのみが意味を持っていたと考えることができる。つまり、リトアニア語の長母音については *ā*, *ō* が A と表記され、*ă* は O と表記される。ただし、Jogáila に見られる鋭調の *ai* の第一要素は比較的長く発音されるようなので A と転写される可能性が生じたのかもしれない。

4 まとめ

アーカニエの起源にかんする議論は、この現象の発生時期が早いか遅いか、そしてその原因が内的要因によるものなのか、それとも他の言語との接触という外的要因によって引き起こされたのかということに論点が絞られている。

発生時期については後期説の方が有力であるように思えるのだが、スラヴ祖語の母音体系の設定の仕方や、想定される母音音素の具体的な音声特徴は研究者によって異なっており、いまだに決着はついていないと思われる。

外的要因、すなわち言語接触によって東スラヴ方言の母音体系に変化をきたしたという他言語基層説は、アーカニエ後期発生説を裏付けるための一つのオプションだと考えることができる。現在のところ、フィノ・ウゴル語とバルト語が基層言語として有力であるのだが、二つの仮説の長短を論じた研究が存在していない。フィノ・ウゴル語基層説よりも後で唱えられたバルト語基層説を主張する研究において、前者への反証が挙げられることはなかった。また、バルト語基層説に対するフィノ・ウゴル語説支持者の反論も見られない。したがって、この点についても決着はついていないのである。

なお、アーカニエの証拠を古文献における表記に求めることはほとんど意味がない。嘆願書 (челобитье) の中で嘆願者が出身地の発音に影響されて O と A を混同しても不敬とみなさないという勅令が公布されたのは皇帝アレクセイ・ミハイロヴィチの時代になってからのことである (1675年) [Виноградов (1982 : 55)]。これは、すでに近代化がはじまりつつあった17

世紀後半のロシアで行政機関が処理すべき文書量が増大したことを意味しているのであるが、その第一の原因は十分な識字教育を受けていない人でも文書を書くようになったということである（近代的な学校制度は当時まだ確立していない）。識字率が低かった中世の東スラヴ語地域では、自らの日常的な発音習慣によって表記が容易に歪められてしまうような識字者はそれほど多くなかった筈で、文献時代初期に時代を遡るほどこうした未熟な書き手の数は少なくなると思われる。従って、文献上に現れたアーカニエ現象にもとづいて、その発生時期を決定することには無理がある。

本論文で検討した発生の問題とならんで、アーカニエの歴史的研究にはもう一つの視点がある。標準文章語史におけるアーカニエの問題である。すなわち、これが標準文章語の発音法（正音法）に採用されているからには、いつ頃からそうなのか、そしてそれがどのような理由によるのかということも検討する必要がある。

注釈

- (1) Н. П. Гринкова, *Воронежские диалекты*. Ленинград. 1947.
- (2) ドイツのゲッティンゲン大学に提出した学位論文。その抄録が Günter J. Stipa, "Phonetische Wechselwirkungen zwischen Moschamordwinisch und Russisch." *Ural-Altaische Jahrbücher*, XXIV, 3-4, 1952, S. 59-64; XXV, 1-2, 1953, S. 23-51 である。
- (3) 「異化的アーカニエ」（диссимилятивное аканье）では、アクセント音節の母音が /a/ 以外の場合に、その直前の非アクセント音節の母音 /a/, /o/ が [a] に近い音声で実現される。しかし、アクセント音節の母音が /a/ だと、[a] よりも弱化の度合いの強い音声 ([ə]) で実現される。これに対して、アクセント音節の母音の種類に関係なく、その直前の非アクセント音節の母音 /a/, /o/ が [a] に近い音になるのを「強いアーカニエ」（сильное аканье）あるいは「非異化的アーカニエ」（недиссимилятивное аканье）と呼ぶ [Касаткин (1989: 45)]。
- (4) [Чекмонас (1987)] に掲載されていた地図をもとにして筆者(岡本)が修正した。
- (5) Р.И.Аванесов, "Лингвистическая география и история русского языка." *Вопросы языкознания*. No.6, 1952. стр. 25-47.
- (6) Оксана Мытько, 《"Сънег" не пойдет, но белорусское правописание ждут перемены》
—<http://7days.belta.by/7days.nsf>.

参考文献

- [Бернштейн (1951)] С. Б. Бернштейн "Вопросы изучения славянских языков в свете трудов И. В. Сталина по языкознанию". (АН СССР), *Учение*

- записки Института славяноведения. Том III, 1951. стр. 5-38.
- [Виноградов (1982)] В. В. Виноградов, *Очерки по истории русского литературного языка XVII—XIX вв.* Изд. 2-е. Переиздано. 1982.
- [Георгиев (1963)] В. И. Георгиев, “Русское аканье и его отношение к системе фонем правянского языка”. *Вопросы языкознания*, No.2. 1963. стр. 20-29.
- [Касаткин (1989)] Л. Л. Касаткин (ред.), *Русская диалектология*. 2-е изд., переработанное. Москва. 1989.
- [Тарашкевіч (1929)] Б. Тарашкевіч, *Беларуская граматыка для школ. Выданьне пятае пераробленае і пашыранае. Вільня*. 1929. (<http://txt.knihi.com/taraskievic/hramatyka/>を利用した)
- [Хабургаев (1965)] Г. А. Хабургаев, “О фонологических условиях развития русского аканья”. *Вопросы языкознания*, No.6. 1965. стр. 53-63.
- [Хабургаев (1980)] Г. А. Хабургаев, *Становление русского языка*. Москва. 1980.
- [Чекмонас (1987)] В. Чекмонас, “Территория зарождения и этапы развития восточнославянского аканья в свете данных лингвогеографии”. *Russian Linguistics*, 11. Amsterdam, 1987.
- [Issatchenko (1980)] Alexander Issatschenko, *Geschichte der russischen Sprache*. 1. Band. Heidelberg, 1980.
- [中村 (2004a)] 中村泰朗, 「ア弁の起源をめぐって」。中村泰朗, 『ロシア語論集』。2004. pp. 21-42. (初出: 『創価大学外国語学科紀要』 第6号。1996. pp. 27-48)
- [中村 (2004b)] 中村泰朗, 「ア弁の起源をめぐって(補遺) —文献上の現れについて—」。中村泰朗, 『ロシア語論集』。2004. pp. 43-56. (初出: 『創価大学外国語学科紀要』 第7号。1997. pp. 51-64)
- [岡本 (1997)] 岡本崇男, 「『バルクラボウ年代記』における表記の規範意識について」。神戸外大論叢 48-3, 1997. pp. 21-51.
- [Shevelov (1964)] George Y. Sevelov, *A Prehistory of Slavic. The Historical Phonology of Common Slavic*. Heidelberg, 1964.
- [Stipa (1974)] Günter J. Stipa, “Ist das russische Akanje durch Substratwirkung entstanden?” *Zeitschrift für slavische Philologie*, Bd. XXXVII/2. S. 325-342.
- [Trubetzkoy (1968)] Nikolaus S. Trubetzkoy, *Altkirchenslavische Grammatik: Schrift-, Laut- und Formensystem*. Graz-Wien-Koln. 1968.
- [Zinkevičius (1996)] Zigmas Zinkevičius, *The History of the Lithuanian Language*. Vilnius, 1996.